

## 《授業と子ども》

### ひらがなの授業 (5)

—「ん」の音・に「ん」の音—

千葉 建夫

「ん」は「ウン」ではないんだよ

五十音図表ができあがったあとは、表の欄外においた「ん」(撥音)の学習にはいった。

はじめて、一年生をもったとき、『ん』は、『ウン』だよ」と教えてしまった。そのあと、子どもたちの作文に「どうぶつえんに いったらね。ぞうの んこがあった。」  
「ぼくは んどろかいで たまいれをしました。」  
と書かれてしまった。

「ん」という音を調べてみると、鼻音で有声音、必ず母音のあとにくる。単独では、とりだしにくい音だということがわかった。例えば「ん」のあとにくる音が「りんご」(g o)のようにgになると、「ん」は鼻濁音のgになるし、「テン」(t o)のようにtがくるとnになる。「たんぽ」(p o)「ぼ」のようにpがくるとmになっている。「ん」という音は、あとにくる音にひかれて微妙に変化する音なのだ。そこまではあつかわなくても、子どもたちには「ん」は「ウン」という二音ではないということ、そして単語の語頭にはこ

いということをしつかり教えないと、「んこ」「んどろかい」のような表記の混乱を子どもたちにさせてしまうことになる。「ん」の音は、これまで勉強した音と区別して子どもたちには「はねる音」と名づけて教えた。

授業は、「ん」の音節を意識させるために、「ん」の音節がはいる単語とは異なる単語を比較することから始めた。ちようど、校庭にあった桐の花が満開になっていた。

その一枝をもらって、教室に入った。

子どもたちは近寄ってきて、「いいにおい」「ふっくらふくらんでいるよ」などいろいろなことを話しかけてくる。「だれか、この花の名前を知っていますか？」

みんなに聞いてみたけど、知っている子はいなかった。桐の花を花瓶にさして、桐の花の絵カードを黒板にはった。(図①) そして、「この花の名前はね」といって、黒板に 

●
---

●
---

 と書いた。

「二つの音だ。」

と子どもたちがいった。

それから点の横に 

き
---

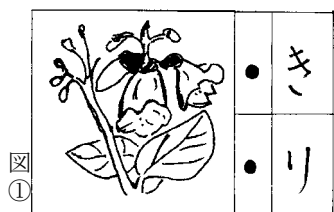
り
---

 と書いた。

「き、り。きり。へーそういうなまえなの。ぼくしらなかつた」

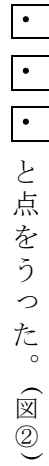
「そうなんだよ。今は、校庭にきれいに咲いているから、あとで見てくださいよ」

と呼びかけ、それから、昔は赤ちゃ



んが生まれたら桐の木をうえたこと、その木が育つとタン  
スや下駄をつくるいい木材になったことなども話してやっ  
た。文字を覚えるだけでなく、知らない単語はできるだけ  
ほんものと出会わせ、子どもたちの語彙を豊かにしてやり  
たいと思う。

次に、もう一枚の絵カードを裏がえしにはった。  
絵カードの下に



「なぞなぞですよ。あててください」

「しつもんしていい？」(いいですよ。)

「さいしよの音はなに？」(キです。)

「二番目の音はなに？」(リです。)

「えーなに？ キリリ？ キリコ？

わかんないよ。三番目の音はなんで

すか？」(それは ひみつです)

「えー。では、花ですか？」(いいえ)

「のりものですか？」(いいえ)

「どうぶつですか？」(そうです)

「キ、リ。わかった。キリンでし

ょう」(そのとおり、あたりです)

絵カードをめくって、きりんの絵を

出した。第一音は「き」、第二音は「り」

なので、「きり」と書いた。次に、

「三つ目の音はどんな音？」

と聞いたら、言い合いになった。

「『ウン』だよ」

「ちがうよ。『ン』だよ」

三つ目の音を「ウン」だという子は、「ウン」「ウン」と  
いいながら、二音節で発音している。「ン」だという子は、  
口を結んでンンン・・・と真つ赤な顔をしてりきんでい  
た。しばらく言い合いになったが、やがて、子どもたち  
は、「が『ウン』という二つの音ではおかしい気がつい  
たようだった。

「そうですね。『きり・』のの音はね、『ウン』と発音し  
たいところなんだけど、ちがう音なんだよ。」

そういって、子どもたちの口を結ばせて、鼻に響くよう  
に、ンンン・・・という音を発音させて確かめた。

そのあとは、「ン」という音は、という文字で書くこ  
とを教えて、文字の書きかたの練習にすすんだ。

この授業は、たまたま校庭に「桐の花」が咲いていたか  
ら、「きり」と「きりん」の比較で「ン」という音をとりに  
す授業になったが、例えば「き(木)」と「きん(金)」、「か(蚊)

と「かん(缶)」の組み合わせでも授業は組めるだろう。

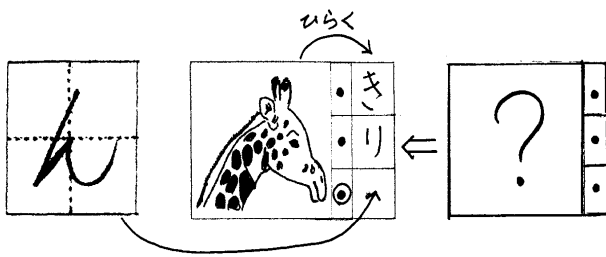
を書く練習のあとは、「ン」のつく単語あつめをした。

「ほん、さん、きん、けん、てんき、きんこ、てんせん・・・」

おもしろいほどいっぱい集まった。「うんち、ちんちん」と

いって笑いころげている子もいる。「わんわん、けんけん、  
とんとん・・・」といいながらとびはねている子もいる。

たくさん集まった単語を黒板に書いて「ん」の文字だけ



図②

に○をつけた。単語のどの音節に「ん」が使われているかを調べると、「ん」が語頭音になる単語は一つもなかった。「ん」の文字は必ず他の文字のあとにきていた。(図③)

『ン』は、単語のいちばんおしまいか、中にしか、つかわれない音なんです。だから、

『うんち』を『んち』のように書きませぬね」といって、「ん」の授業をまとめた。

にごった音は てんてんつけて、

つづいて、濁音の学習にはいった。濁音は「にごった音」と言う名前を与え、清音・「すんだと音」との対比で学習をすすめた。濁音を清音と対比してとりあげることによって、これまで、清音の文字をおぼえきれずにいた子や、忘れてしまった子も見つけることができた。その子には濁音の授業を進めながら清音の復習も同時にできたと思う。

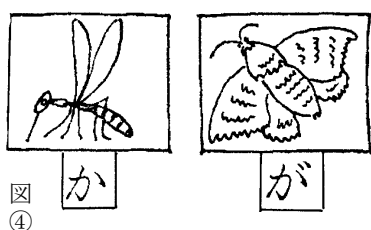
濁音の学習は「ガ」の音から始めた。子どもたちを教卓の前にあつめて、二つのびんを子どもたちに見せた。

「このびんの中に いきものははいっているんだよ。何だと思う？」



図③

子どもたちが、じいっとびんの中をのぞきこんでいる。「これ、なに？あつ、虫だ！ハチ？ ハエ？」  
「もつとちっちゃいよ。カ(蚊)じゃないの？」  
「うー。カ。ぼく、きらいだよ。きゅうけつきなんだもん」  
顔をしかめて 逃げ出す子もいる。  
「これは、カでした。今度はこっちのビンにるのは？」  
「チョウチョウかな？」  
「なんか、はねが、けぶかいな」  
「わかった。これ、ガだよ。夜、よくとんでくるやつね」  
「チョウはひらひらだけど、ガはべたつとはりつくんだ」  
びんの中に入っていたのは、「蚊」と「蛾」だった。しばらくは、これらの虫の生態の観察とおしゃべりになった。



図④

子どもたちを座席にもどらせて、黒板に二枚の絵カード(図④)をはった。どちらも一音節の単語であること確かめながら、蚊の絵カードに「か」と書き、次に「蛾」の絵カードの下にも大きくゆっくり「か」と書いた。とたんに  
「ちがうよ。せんせい、こっち(蚊)は「カ」だけど、こっち(蛾)は『ガ』でしょ。字がおなじじゃ、おかしいよ」  
もう、知っている子もいる。  
「『ガ』は、「カ」にテンテンなんだ」とさかんに発言してくる。  
「そうだね。こうすると(濁点をうつ)、

「か」は「が」という字になるんだね」と文字の形の説明をした。

「ちよつと形がちがって、ちがった虫になつちやつた」

子どもたちから感心したような声が聞こえた。

それから、「か」と「が」の字形をノートに練習した。ノートにならんだその文字を「か、か、か、か」、「が、が、が」と連続して発音させてみたら、「カとガは、口のかたちがおなじみたい」と気がつく子どもも出てきた。このようにして濁音の導入を終えて、次はガ行の学習にすすんでいった。

### にんじゃごっこでへんしんだ

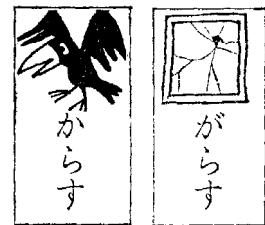
「かな文字の教え方」の中で、著者の須田清さんが「ガ」行について、おもしろい授業の展開例を紹介している。

《お話し》 にんじゃごっこ

「忍者はあぶなくなると、ぱつと姿をかえるでしょう。いま、忍者は「からす」を飛ばしています。ところが、敵が、鉄砲をもってきました。「あつ、からす、あぶない！からす、あぶない！」



忍者は用意していたふたつの石をパツとなげました。石はビューンと飛んで、「か」という字にびたり、あらら、あらら、ふしぎ、ふしぎ、からすはなにかわつたでしょう。



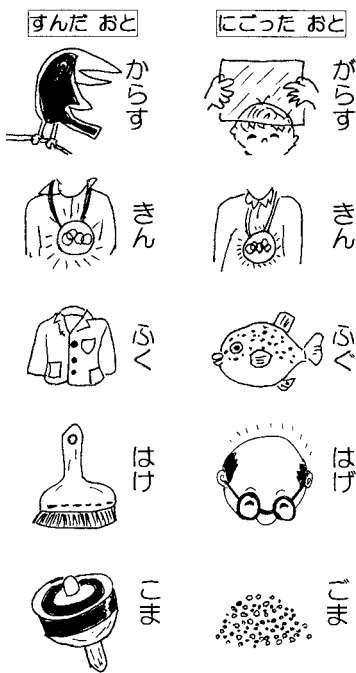
働きをしました。みんなもこの忍法をおぼえましたか」

「か」という文字に小石をふたつ投げると、「が」の字にかわる。このお話を子どもたちはとても喜んだ。そして、

自分も忍者になって、ふたつの小石をカ行の単語に次々ぶつけて、ガ行の単語に変身させて遊んだ。(図⑤)

忍者ごっこは、いろんなバージョンをつくる事ができる。手品師が「からす」にゴマをばらばらふりかけて「ガラス」に変えたり、ブラックボックスに黒い玉を二個いれて変身させたり、どれも、子どもたちに大うけだった。

カ行の濁音節がおわつたら、最後にカ行とガ行の両者を対



図⑤

応させてまとめた。そのあと、ガ行の濁音をふくむ「めがね、かがみ、もぐら、たまご、うぐいす」のような単語をさがしだし、子どもたちと絵カードに書いたり、逆に、絵カードを見て、その名前を文字に書いたりする練習を繰り返しておこなった。

他の行の濁音の授業も、対になる清音と濁音の単語の対比を原則にしながらいろいろな展開を工夫できると思う。

「ぢ」と「じ」は、どっちをつかうの？

ダ行には、破裂音の「だ、で、ど」と破裂摩擦音の「ぢ、づ」が混在している。この「ぢ」「づ」はザ行の「じ」と「ず」とおなじ音節だと気がつく子どもでてくる。

「あれ、『ぢ』と『じ』と 同じ音じゃない」

「『づ』と『ず』も同じだよ。どっちをつかってもいいの」と子どもたちに質問されたことがあった。

この時は、「ジ」の音を「じ」の文字で書いている単語を教科書と絵本の中からみんな探してみることにした。

「じしん、じかん、じいさん、じんじゃ、じごく くじら、じさつ、じけん、じんこーえいせい、じびきあみ・」

いろいろみつけた。みんな「じ」で書いてあった。

「みんな、『じ』じゃないか」

と子どもたちがいった。

「ぢ」がないかと必死に探していたきみよちゃん「あったー」と大声をあげた。

「『はなぢ』だよ。なんで これだけ、『ぢ』なの」

「『はなぢ』ってき、はなからでるち(血)なんじゃない」

「なるほど、だから、『はなぢ』なんだね」

子どもたちの発見に感心してしまった。そのあとに「ばかぢから(ばか+ちから)」もみつかった。

「ず」と「づ」も同じように調べてみた。

「みず、すずめ、ずきん、ずかん、すずき、ずんだもち」と、これもみんな、「ず」ばかりだった。

ところが、「かみづつみ」と「おりづる」が見つかった。

子どもたちは、「はなぢ」のときと同じように、

「『かみ』に『つつむ』から『かみづつみ』で、『つる』を『おる』から『おりづる』か」

と考えて、しきりに感心していた。このようにして、「ぢ」と「づ」は、なんとなく特別のときに使う文字なんだと気がついていったようだった。

「なにぬねの」には、てんてんがないの？

ダ行の「だぢづでど」を終えて、バ行の「ばびぶべぼ」

にはいろいろとしたときだった。子どもたちから、

「せんせい、『なにぬねの』には、てんてん、つかないの」と質問があった。これは、説明がむずかしい。

音節はふつう、子音+母音でできているが、その子音が無声音(声帯を震わせない)であれば、清音になり、有声音(声帯を震わせる)であれば、濁音になる。ナ行、マ行、ラ

行、ワ行の音節はすでに有声の音節「濁音」をもっている  
ので、対立する濁音をもつことはできないのだ。ローマ字  
で書いてみると、これがはっきり見えてくる。

しかたがないので、『まみむめも』にてんてんをつけて、  
いってごらん」といってみた。子どもたちは、「まーみー  
むー」としわがれたどなり声をあげた。その声でみんな大  
笑いをした。「うー、のどが痛いよ」と子どもたちがいつ  
ている。てんてんをつけて、濁音が作れる音と作れない音が  
あるようだ、なんとなく気がついてくれただろうか。

「五十音の音には、にごった音にすると、のどが苦しくな  
っていいないものがあるようだね」といって、ここは深入りしないようにした。

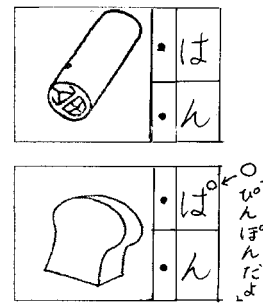
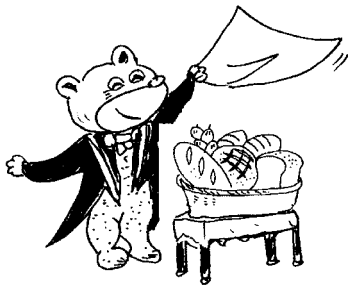
ハぎょうに ピンポンだまのせて 「ぱぴぷへぽ」

ハ行にはバ行とパ行がある。パ行の授業では、校長室か  
らできるだけ大きな印鑑をかりてきた。

「はんこだ」とわかった。

『はんこ』を『はん』ともいうの  
だよ」と教えて、《くまさんの手  
品師のおはなし》をした。

「手品師のくまさんが、おさらに  
はん(印鑑)をのせました。それか  
ら、きれをかぶせて、『おいしくな  
あれ』と呪文をとなえて、ちいさ



図⑥

はんとぼんの二枚の絵カード

(図⑥)をはって、どちらも二音節

であるのを確かめた。それからハ  
ンにはほんとかきこみ、パンに  
はんとかきこんだ。の音がパ  
であることを確認し、ぱの文字を  
おしえた。すると、「白い玉はピン

な白い玉をおとしました。何  
にかわったでしょうか?(さ  
つと白い布をとる)「

「あ、  
パン。  
おいし  
そう」

くりのみ	ぱらぱら
まめまき	ぱらぱら
やぶいて	びりびり
やけどで	びりびり
おさんぽ	ぶらぶら
みのむし	ぶらぶら
おはなし	べらべら
にほんご	べらべら
ふるくて	ほろほろ
なみだが	ほろほろ

図⑦

ポン玉だね」とつとむ君がいった。つづいて、ピプペポの  
音のはいった単語の絵カードをみせ、文字を教えようとし  
たら、子どもたちは、「かんたん、かんたん、『はひふへほ』  
に、みんな、ピンポン玉をのせると『パピプペポ』の字に  
なるんだね」とすぐ理解してしまった。そのあとは、「びん」  
と「ピン」、「べんち」と「ぺんち」、「ぼち」と「ぼち」に  
変身させて楽しんだ。

最後に清音と濁音の全体表を整理し、各行をリズムに合  
わせてとなえておぼえた。濁音をたくさんふくんだ「こと  
ばあそび」(図⑦)もいくつか考えた。習った文字をよんだり  
書いたりする学習も平行して十分取り組ませたいと思う。